

項目	内容
<p>地域の概要 現状と課題</p>	<p><アイヌ文化伝承を巡る地域の現状> (1) アイヌの人口 石狩地域では古くからアイヌの人々が居住しており、『アイヌ史料集第1巻一般概況編』によると1823年に2,054人、1870～1884年にかけては平均で196戸、940人が報告された。 現在は、全道のアイヌ人口23,782人の8.7%にあたる2,059人が居住している。(平成18年北海道アイヌ生活実態調査) (2) 課題 ・市民等へのアイヌ文化の普及が今なお不十分であることから、アイヌ語・アイヌ文化を保存、継承、発展させていくために、アイヌの人々による伝承活動や普及啓発を促進する必要がある。 ・アイヌ文化を継承していく継承者・実践者を若者へ拡大していく必要がある。 (3) 地域における取組 北海道アイヌ協会札幌支部会員(291名)ほか、札幌ウボボ保存会(会員33人)、アンコラチメノコウタラ(会員14人)、アイヌアートプロジェクト(会員24人)、マユニタラモシリ・トンコリ保存会(会員15人)イノミの会(会員12人)、樺太アイヌ協会(会員45人)、ウハノッカ友の会(会員10人)アイヌ民族会議(会員20人)、アイヌアカデミー(会員8人)、現代アイヌ研究会(会員20人)、ウコチャランケの会(20人)をはじめ、積極的な活動をするアイヌコミュニティが多数存在している。</p>
<p>地域の特性</p>	<p>1 地域の概要 市内では、埋蔵文化財が多く発見され、特に擦文文化期の遺跡が多くあり、アイヌ文化期以前、少なくとも擦文文化期には、アイヌ民族に繋がる先住民族であった証が沢山見られる地域である。また、この地域は、石狩川を基点として、北は樺太、南は江差、松前、十三湊等との日本海側の海路による交易の拠点であった。 さらに、墓標の形式の分布においても、八雲、虻田から小樽、札幌、浜益へと繋がる日本海側の地域と共通し、又サに祀られる神の種類の地域的比較においても、札幌は、山と川と海型の地域特性を有すると見られている。</p> <p>2 札幌地域のアイヌ文化 札幌地域のアイヌ文化を歴史的・地誌的特性で整理すると、おおむね以下のようにまとめることができる。</p> <p>① <u>札幌市内の埋蔵文化財からアイヌ文化や石狩川との関わり</u> 北海道は縄文、続縄文、擦文、アイヌ文化期と続いてきたが、札幌市内では埋蔵文化財の発掘によって包蔵地が500カ所以上確認されており、今後もさらに確認される可能性のある場所も存在する。したがってアイヌ期以前、特に擦文文化期にはアイヌ民族に繋がる先住民族であった証が多く見られる地域であるということが出来る。また、札幌地域及び石狩等近郊の平野部では、擦文文化前期の遺跡も発見されており、アイヌ文化が形成されていく過程で、この地域が重要な役割を担っていたことを示しており、石狩川と深い関わりを持っていたと考えられている。</p> <p>② <u>石狩川を基点とした石狩アイヌの活発な交易</u> 13・14世紀には津軽十三湊は京船、夷船の集まる重要な港になっており、アイヌの人々がもたらしたものは獣皮や干鮭などであったと推測されるが、アイヌの人々に対して与えられたものは金属製品や木製容器、漆器類、衣料、米、酒などの本州産の製品・産物である。これらが多量にアイヌ社会にもたらされたことにより、アイヌの人々の生活や文化に大きな影響を与え、アイヌの人々による近世的な社会へと変貌をとげていった。</p> <p>寛文期(1660年代)「津軽一統志」などの文献によれば、商い場(交易所)やアイヌの人々の居住の事実あるいは有力な指導者が率いる地域集団の存在等が記録されている。</p> <p>③ <u>日本海側の地域や樺太(エンチウ)などとの活発な交易</u> この地域は、石狩川を基点として、北は樺太、南は江差、松前、十三湊等との日本海側の海路による交易の拠点でもあり、特に樺太アイヌ(エンチウ)との交易では、鮭・鱒と獣皮や油、代表的なものではアザラシ(トッカリ)、トナカイ(トナカイ)等が挙げられ、エンチウとの関連性がこの地域の特性の一つとなっている。</p> <p>④ <u>松前藩の場所請負制度で重要交易拠点となっていた石狩十三場所</u> しかし、1600年代からの松前藩、商人、幕府による交易(特に場所請負制度)等によってアイヌの人々は大きな影響を受けた。特に、石狩十三場所の交易で働くアイヌの人々に対する労働力の集中的利用や疾病の流行により、人口が激減するとともに、生活や文化が大きく破壊され、さらに明治政府により講じられた各種施策の結果として、伝統的文化が一層衰退していくこととなる。</p> <p>ただ、幕末から明治にかけての記録(「新札幌市史第2巻」)によると、札幌地域の集落ではチセ内部の高い位</p>

	<p>置には「器」を飾り、アッシを織る道具があったとあり、アイヌの人々の生活文化が大きく破壊されたとはいえず、個々においては伝統的な生活を送っていたと見られる石狩地域の文化が記録されている。</p> <p>⑤ <u>川を中心としての交通の要衝であった札幌の中心部</u></p> <p>一方、地誌的に見ると、石狩川水系と東西連絡路の歴史がある。</p> <p>製作年代のはっきりしている地図で、現在の札幌市域を含むイシカリ川水系が登場してくるのは、「元禄御国絵図」をもって最初とされる。その後、場所請負人等により札幌付近の地図が作られるようになったが、その中の「イシカリ川之図」においてコタン集落を示す位置は、現在の札幌近郊の4河川沿いに数箇所ずつ11カ所所在している。</p> <p>ア ハッサム川：ハッサム、同川上流部 イ 旧サッポロ川：サッポロ、ナイホウ ウ コトニ川：シノロ、コトニ、ヨコシヘツ エ サッポロ川：ツイシカリ、アシシベツ川とトイヒラの間、トイヒラ、マコマナイ</p> <p>さらに、石狩川からいわゆるシコツ超えルートは、かなり古い時代から北海道島中部を貫く要路として認識されていたようである。</p> <p>18世紀の「飛騨屋伐木図」によれば、伐木された材木の河口までの搬送ルートとして、さらにそこで働く人々の食料運搬通路として、「山方道」や「川流し道」が一時頻りに利用されていたことが窺われる。そして「ヲシヨシ川」が現在の精進川であるとするれば、現在の札幌市の中心部付近は、「アブ田道」と「シコツ道」、それに「メセホイ道」のちょうど分岐点にあたることになり、和人の「舟場」や宿泊施設もあって、札幌市の中心部は、交通の要衝に位置していたと推測される。</p> <p>また、石狩川は、記録にあらわれはじめると同時に洪水を繰り返しおこしており、19世紀のはじめツイシカリ川がサッポロ川の本流となり、現在の豊平川と呼んでいる川が誕生した。このことでサッポロ川はフシコサッポロ川（フシコは古いという意味）と名前を変えたようである。</p> <p>このように石狩川は、道内最大の河川であり、石狩川水系の流域には鮭が大量に遡上していた—それが日本海側の交易拠点として、アイヌの人々の生活と深く関係していた—ことが札幌地域の特性と言える。</p> <p>また、この地域はアイヌ民族の系統・分派からみればシュムウンクルの系統とみられ、墓標の形式の分布においても八雲、虻田から小樽、札幌、浜益へと繋がる日本海側の地域と共通し、又サに祀られる神の種類の地域的比較においても札幌は山と川と海型の特性を有すると見られている。</p> <p>⑥ <u>札幌地域の特性故に全道各地から集まってきたアイヌの人々の存在</u></p> <p>北海道の中心都市として、かつ交易の拠点であったことから、全道各地からアイヌの人々が移り住み、同時に地域の生活様式、文化が持ち込まれた。このことが多様な文化をこの地域にもたらしている。</p> <p>また、札幌市は、道庁所在地として、最大の人口を有する都市であり、アイヌ文化関連に限らず、大規模な会議やイベントも多数開催されているなど、情報発信の面などにおいて、強みを持っているところ。</p>
<p>目指す姿</p>	<p><目指す姿></p> <p>・実践・普及型イオル</p> <p>自然豊かで多彩な植生を活かした自然素材の利用・再生と体験交流の実践。</p> <p>石狩川を基点とした日本海側の海路による交易の拠点としての地域特性や、市内に多く残るアイヌ語地名、全道各地から転入してきたアイヌの人々による文化などの体験を通じて普及・啓発の促進を図る「実践・普及型イオル」として、平取・白老と互いに機能分担を図る。</p> <p>○取り組み内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然素材の利用・再生と体験交流の実践、普及啓発 ・アイヌ語地名の由来の確認や、アイヌ文化の伝統的儀礼の追体験
<p>基本的方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の特性を活かした事業展開を図る。 ・(財)アイヌ文化振興・研究推進機構からの委託を受けて、札幌市が、適切に管理・監督を行うことを前提として、アイヌの人々が主体性を発揮した管理運営を行うことを基本とする。 ・具体的には、札幌市と北海道アイヌ協会札幌支部で構成する「札幌地域イオル再生事業運営委員会」を設置し、事業の推進・管理を行う。なお、運営委員会には、支部の若い方々も参画する。
<p>事業実施への検討推進体制</p>	<p><推進体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「札幌地域イオル再生事業運営委員会」が、事業の実施主体である(財)アイヌ文化振興・研究推進機構と、事業の進捗の状況を検討し、的確な事業推進を確保する。

事業展開

<p>1 基本的方針・空間の設定</p>	<p><イオルの拠点> ・南区小金湯ピリカコタンの既存施設を活用する ・南区小金湯の市土地開発公社所有地を中心に、体験交流の実践ゾーンの設定。</p> <p><イオル空間再生に必要な空間> ・伝承活動に活用する自然素材の植栽・育成の空間 ・アイヌ民族の文化・歴史・遺跡や生活・自然観を学べる空間 ・食文化をはじめ、アイヌ民族の独自の生活を体験できる空間</p>
<p>2 空間の整備</p>	<p><整備しようとする空間> ・素材供給空間 : 南区小金湯の市土地開発公社所有地 (約2,000㎡)</p>
<p>3 自然素材の栽培・育成</p>	<p>・体験交流に必要とする食用・薬用植物等の自然素材を栽培・育成する。 ・場所・・・2に記載の土地</p>
<p>4 人材育成</p>	<p><アイヌ文化の体験・学習・交流活動及びその成果の活用としての人材育成> ・2に記載の土地において自然素材を栽培、育成することを通じた、当該過程に関する知見を持った人材の育成。 ・必要に応じ、鮭漁に関わる一連の総合的伝統儀式等を体験交流活動の一環として実施</p>
<p>5 空間活用</p>	<p>(1) 空間形成等 2に記載の土地における空間形成のほか、必要に応じ、空間における自然素材の採取や、鮭漁に関わる一連の総合的伝統儀式の実施等を行う。</p> <p>(2) 文化実践空間の活用 当該地域におけるアイヌ文化の普及・啓発活動等の実施には、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構が行う各種事業などを活用するとともに、札幌市及び北海道アイヌ協会札幌支部が、本事業とは別に、取組を推進する。</p> <p>(3) アイヌ文化の理解促進 アイヌの人々が日常使用していた民具づくりを通じて、生活の知恵・工夫・技法などを学ぶ。 ウパシチャルセ(雪滑り)、ウコ・ウパス・ケ(雪合戦)等の昔の子供の遊びの伝承・体験 交易で栄えていた石狩アイヌの歴史について聞き取り調査。</p>

<p>空間の管理運営</p>	<p>イオル空間の管理運営は、基本的方針の欄において記載のとおり。</p>
<p>市民との連携・協力体制</p>	<p>・ネット等での情報発信を行う。 ・市の広報媒体を活用した周知を行い、各種行事への市民の参加を呼び掛ける。</p>
<p>ネットワークの活用</p>	<p>・必要とする自然素材を、白老・平取地域から提供を受ける。 ・両地域との交流を通じ、人材の活用を進める。</p>
<p>その他</p>	

資料 地域の特性（地域基礎データ）

項 目	札幌地域	備 考
概 要	石狩平野の南西部に位置 東は石狩川から野幌原始林にかけて低地帯 西は手稲山系 南は支笏洞爺国立公園に連なる一大山地 北は日本海に接する石狩砂丘地	札幌市政概要
面 積	112,112ha (100.0%)	札幌市統計書
山 林	70,603ha (63.0%)	(地目別面積の状況)
国 有 林	55,332ha (49.4%)	(森林面積及び蓄積の推移)
市 有 林	1,911ha (1.7%)	平成 22 年度
民 有 林	13,360ha (11.9%)	
原 野	1,209ha (1.1%)	
農地(田畑等)	2,533ha (2.2%)	
宅 地	13,493ha (12.0%)	
雑 種 地	2,674ha (2.4%)	
池 沼	4ha (0.0%)	
そ の 他	21,596ha (19.3%)	
人 口	1,915,542 人	平成 23 年 4 月 1 日現在・推計人口 (国勢調査ベース)
アイヌ人口	2,059 人	北海道の資料 (平成 18 年)
協会会員数	(全道) 3,470 人	(社)北海道アイヌ協会
支部会員数	291 人	(平成 22 年)
居住地域	市内各所に居住	
産業別就業者数	940,300 人(市人口の 49.6%)	平成 19 年 10 月 1 日現在・推計人口 (国勢調査ベース) :
第 1 次産業	1,900 人(就業者の 0.2%)	1,894,344 人
第 2 次産業	140,550 人(就業者の 14.9%)	
第 3 次産業	752,700 人(就業者の 80.0%)	

項 目		札幌地域	備考
地形概要		豊平川扇状地、石狩低地帯、南西部山地、東南部丘陵地に分類される。	
植生概要		地形・地質が変化に富み、植物分布の北方型と南方型の接点にあるため、北海道に産する野生種の約半数が見られる。トドマツ、エゾマツ、カツラ、イタヤ類、ナラ類、エゾヤマザクラ、ナナカマド、シラカンバ等がある。	
文化 特 性	信仰・儀礼等	石狩アイヌに加えて、全道各地や樺太から転入したアイヌ民族の文化が存在する。	
	住 居		
	衣 服		
	芸 能		
	言語・口承文芸		
アイヌ文化 関係施設		北海道大学アイヌ・先住民研究センター 北海道立アイヌ民族文化研究センター 北海道開拓記念館 札幌市アイヌ文化交流センター	
活動団体		(社)北海道アイヌ協会札幌支部 札幌ウポポ保存会(会員 33 人) アンコラチメノコウタラ(会員 14 人) アイヌアートプロジェクト(会員 24 人) マユニタラモシリ・トンコリ保存会(会員 15 人) イノミの会 (会員 12 人) 樺太アイヌ協会 (会員 45 人) ウハノッカ友の会 (会員 10 人) アイヌ民族会議 (会員 20 人) アイヌアカデミー (会員 8 人) 現代アイヌ研究会 (会員 20 人) ウコチャランケの会 (会員 20 人)	
文化の伝承・保存			
	環 境	大都市と自然が隣接 気候・地形の影響により変化に富む植生 擦文文化等の歴史的背景の深さ 数多く残るアイヌ語地名 各地から転入したアイヌ民族の多様な文化が存在 大学や博物館等の研究機関・研究者の集積	
	形 態	札幌市アイヌ文化交流センターを中心にアイヌ文化を保存し 情報を発信する。	

分野	言葉・祈り・芸能、衣服、食、住居、工芸、ネイチャーガイド	
伝承実践者数		伝承活動実施状況調査(H21年・札幌)
言語・口承文芸	アイヌ語：43人 口承文芸：10人	
儀式・風俗	50～80人	
信仰観	20人	
衣服	5人	
食	20人	
住	28人	
舞踊・音楽	86人	
工芸	33人	
生業	9人	
植物利用	20人	
習慣・知識	2人	
生活文化	狩猟・漁撈：10人	